

ミャンマー邦人社会 2014 年の現状と課題
～メンタルヘルスを中心に～

勝田 吉彰

日本渡航医学会誌

Vol. 8/No. 1, 2014

ミャンマー邦人社会 2014 年の現状と課題 ～メンタルヘルスを中心に～

勝田 吉彰*¹

*¹ 関西福祉大学

要 旨

民主化による政治経済状況の改善とともに日系企業の進出および在留邦人数が急増しつつあるミャンマーのメンタルヘルス環境について、2014年の状況をアンケート調査および聞き取り調査を行った。

現地の在留邦人は、民主化以前から駐在していた群、民主化後の進出ブームに乗ってきた群、若年起業者や個人事業主の3群が主である。邦人のストレス要因として、インフラ（通信・生活・交通・医療）の未整備、ミャンマー人、娯楽の欠如が上位を占めた。また、数は少ないものの、聞き取りが進むと、「急速な変化の下、国の運営のされ方が分からないこと、現状把握のむずかしさ」、「日本の本社」など仕事上の困難が明らかになった。

「感染症の存在」はストレス要因として認識されることは少ないものの、狂犬病は市街地における野良犬の跋扈という形で可視化されやすく、多く気にされていた。

キーワード：ミャンマー、在留邦人、メンタルヘルス環境、ストレス要因

はじめに

筆者は、今後日系企業の進出が大規模に進むとともに在留邦人数の急速な増加が見込まれ、また、国自体が急速に変貌しゆくミャンマーにて、在留邦人をとりまく環境の変化を継続的に定点観測を行っている。これまで2012～13年時点の現地ストレス要因¹⁾および精神科医療事情²⁾について報告を行ってきたが、本報では2014年時点の現状を記録・報告する。

1. 日本人社会の現状

2014年度の外務省海外在留邦人数調査統計によるミャンマーの邦人数は891人である³⁾。前年度に比べて42.6%増ではあるものの、インドネシア16,296人、ベトナム12,254人に比べれば桁違いに少ない。これは、2011年までの軍事政権による人権抑圧を理由とした欧米諸国の経済制裁という“不自然な重し”により国外か

らの投資・進出が抑えられてきた事情のためであるが、それが解消した現在、今後の大幅な投資・進出の伸びが見込まれている。2014年時点で在留邦人は大きく3つのグループから成っている。

1) 民主化以前の軍事政権時代から駐在していた群

現在のミャンマーブームが始まる以前の軍事政権時代からミャンマーに進出していた企業が少数ある。縫製業や製材業など労働集約型産業が工場を立地していた。また、NGOとして医療支援や社会支援活動を行う団体もブーム以前から5団体が活動中である。これらは生活基盤の未整備ななか、長年奮闘してきた百戦錬磨の層で、メンタル的には比較的安定している。賃金の高騰など環境の激変がなければ今後とも現状維持してゆくと考えられる。

2) 民主化後の進出ブームに乗って進出してくる企業群の従業員

経済界のチャイナ・プラス・ワンの流れに乗ってミャンマー進出を決定し、先遣隊的性格をもつ小規模駐在事務所を開設する動きが目立っている。そこに配置される駐在員はすでに他国で実績をあげた者が選ばれることが多く、2014年時点ではメンタル面でも比較的安定して

連絡先：勝田 吉彰

〒678-0255 兵庫県赤穂市新田 380-3

関西福祉大学社会福祉学部

TEL：0791-46-2525 FAX：0791-46-2526

E-mail：katsuda@tkk.att.ne.jp

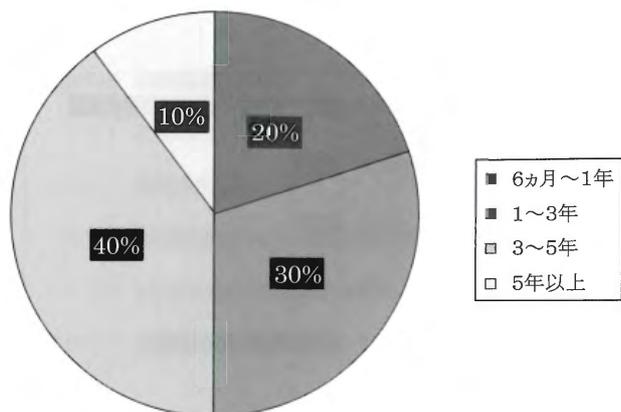


図1 ミャンマー滞在期間

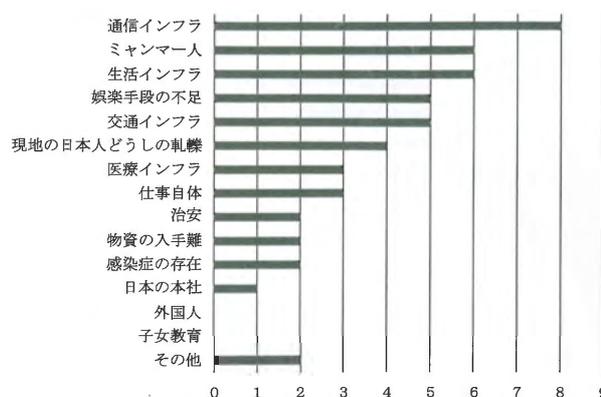


図2 ミャンマー生活においてストレスを感じる要因

いる状況にある。2015年に一部先行開業が予定されているティラワ工業団地への工場開設を視野に入れた製造業のほか、将来の市場を狙って進出してきたサービス業が先行して立ち上がり、邦人数増加をリードしている。

今後、急速かつ大幅な増加が見込まれる中核群であり、先行する中国やタイでみられるのと同様の、海外生活初心者が増加が予想されるので注視してゆきたい。

3) 若年起業家・個人事業主・零細企業従業員

大きな組織の後ろ盾をもたない20歳代後半から30歳代の若年層も存在感をもっている。その事業内容は、小売業・不動産業・会計事務所・エアロビクススタジオ・フリーペーパー編集発行など多岐にわたっている。

II. 邦人の意識調査

日本人会関係者の協力を得て、在留邦人の意識調査を行った。方法は、日本人会役員の呼びかけにより、現地勤務者11名の集まるミーティングを設定し、アンケート調査および聞き取り調査を実施した。聞き取りはアルコールも交え、ざっくばらんに本音を語っていただいた。本稿では、アンケート調査結果を示すとともに、聞き取り内容を交えながら報告する。

対象者はすべて企業駐在員で、滞在期間を図1に示す。

調査項目は①ミャンマー生活においてストレスを感じる要因、②プライベート時間の過ごし方、③気になる感染症、④医療で求めるもの、の4項目である。

ストレスを感じる要因を図2に示す。上位をインフラ関連が占めた。通信インフラではインターネット回線の問題が大きく、通信速度の遅さ、頻繁に切断されることなど、ほぼ全員が支障を感じていた。また、郵便物の検閲が厳重に行われ、先進国では当然の「通信の秘密」の概念がない。小包類はもとより、封書の開封も頻繁に行われている。帯同家族が受験にあたって日本人学校で書

いてもらった内申書を日本の志望校に送ろうとしたところ、それが開封されてしまい内申書が無効になったという深刻な事例もある。実際、筆者自身も、ミャンマー人の知人に贈った医学書が通関に1ヵ月かかったり、音楽CDが途中で消失して届かなかった経験をしている。このような事情から、重要な郵便物はわざわざ飛行機に乗ってバンコクまで差出しに行く邦人もいる。生活インフラでは外国人居住に適するサービスアパートメントが絶対的に足りないうえ、電力供給量が不足しており、特に乾季には停電に悩まされる。交通インフラは、自動車輸入制限の緩和から渋滞が深刻化してきており、目的地到着までの時間が読めなくなっている。雨季には道路の冠水が日常的に発生し渋滞に輪をかけている。公共交通も未整備で、その将来的整備計画が発表されたり、ヤンゴン環状線に日本のJRからの中古車両が一部導入され始めてはいるものの、邦人が日常的に利用できる状況にはなっていない。

インフラと並んで多く選択されたのが「ミャンマー人」であった。現地人の気質は大いに駐在者のメンタルヘルスを左右する。ミャンマー人氣質について成書では、勤勉・親日的・礼儀正しい・謙譲・歓待好き・信心深いなどと紹介されているものが多い^{4,5)}。しかし本調査では、「ミャンマー人」がストレス要因の上位に位置した。その原因として「言い訳が多い」、「働かない」、「(女性に対し) ストーカーになる」、「衛生観念の違い」も語られる。また、身近なミャンマー人に酒が入ると豹変して驚いたという経験を語る邦人が多い。「アルコールが入るとカッとなって暴れる」、「切れたら怖い。カッとなるのは南方系の気質だと思う」、「ミャンマー人どうして投石の喧嘩を始めた」と複数の証言が得られ、ミャンマー人どうしの殺傷事件がこの5年間で2.5倍になったことをあげ、鬱積したものがあるのではないかと分析も聞いた。他方、ミャンマー人の「親日的」な部分ではおおむね意見が一致しており、日本に対する畏敬

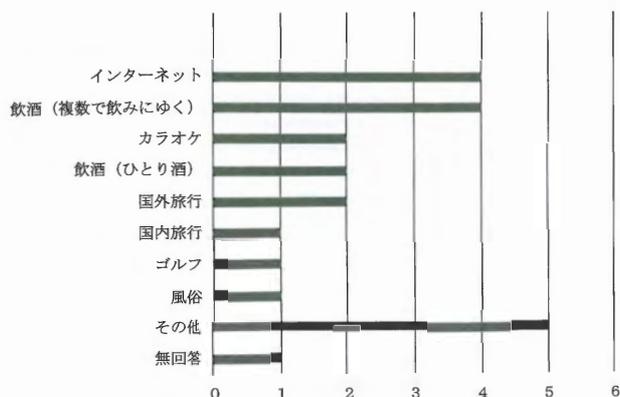


図3 余暇の過ごし方

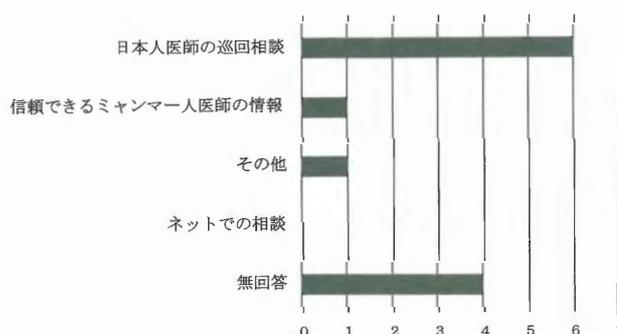


図4 求められる医療情報

の念があること、日本人の友人をもつことがステータスになっていることなどを指摘し、中国人やインド人に比べ理解しやすいとの声もある。上海で勤務経験のある邦人は、中国人と比べてものの考え方・マインドが根本的なところで日本人に近いことをあげ、政治問題を抜きにしてもずっとやりやすいとも語っている。なお、民主化以降のブームに乗って最近やってくる日本人に対して、「搾取しに来ている」的な感情を語る現地人も出始めているとの情報も、ある NGO 関係者から表出されており、対日感情について今後どう変化するか要観察であろう。

もうひとつ上位に位置するのが「娯楽手段の欠如」である。余暇の過ごし方を図3に示す。インターネット・飲酒・カラオケ・ゴルフと限られ、実際にヤンゴンの街を歩いても娯楽施設を目にすることが少ないが、「その他」の選択も多く、その内容は「踊りに行く」、「僧院に行く」、「寺院に行く」、「瞑想する」、「気功」など現地の文化に馴染んだユニークなものもみられ、独自の楽しみ方を見つけている層もうかがえた。

現地の日本人どうしの軋轢という、世界中の在留邦人社会でみられる古典的なストレス要因も一定数みられた。

医療インフラについては、これまで在住外国人数が少なく、外国人や富裕層向け医療機関が少なかったことがあるが、今後の経済発展を見込んで新たな外国人や富裕層向け医療機関の新設も相次いでおり、これから先、状況の改善も期待される。先進国からの駐在者の急増を見込んで、富裕層や外国人向け医療機関の整備が進みつつあるが、これは民主化後の2012年以降のことで、在留邦人の信頼を得るにはいたっていない。「きちんと診断してもらえない」、「治らない」、「もともと診てもらわない（具合が悪ければタイへ行く）」と現地医療への不信が口々に語られている。このような条件下、「医療に求めるもの」を図4に示す。日本人医師の巡回相談がほと

んどを占めている。実際、本来ミャンマー人の医療支援活動に入っている NGO のサイトに相談メールが寄せられたりもしている。

少数であるが「仕事自体」がストレス要因とするものもあった。その原因として、以前には想像もつかなかったスピードで物事が変化しており（これを日本の明治維新にたとえる人もいるほどだ）、そのような状況下、明文化されていないことも多く、国がどう運営されているのか分かりにくく、「分かる」ことにエネルギー消耗する実状がある。逆に、旧来の途上国的ペースもまだまだ残っており、役所の手続きの遅さを原因として日本からの赴任が遅れることさえある。駐在員事務所を開設しても契約の日になっても入居できず、3週間遅れを経験した、月単位で遅れたという嘆きも聞かれる。この“ペースの違いによる混乱”がビジネスパーソン共通のストレス要因となっている。さらに、中国ビジネス関連では“人治主義”と形容される、法律ではなく担当者の胸三寸次第でビジネスが左右される現象があり、これに類似した要素もみうけられる。人脈が幅を利かせ、ビジネス案件は信頼できる人から紹介を受けた人でないとうまくゆかない。

感染症の存在も少数ながら選択されている。ストレス要因としての「感染症の存在」の選択者は少ないものの、気になる感染症を外務省⁶⁾・厚生労働省⁷⁾ホームページにあげられたものから選択肢を提示し問う設問では図5に示すごとく、無記入はなく全員がなんらかの感染症を選択していた。感染症の存在を意識はするものの、実際に罹患することなく健康な状態では、ストレスとして実感できていないものと思われる。気になる感染症として最も選択されたのが狂犬病で、実際、ヤンゴンでは繁華街や中央駅のような場所でさえ野良犬が多数闊歩する姿がみられ、これは目に見える脅威と認識されている（図6）。その他、デング熱・肝炎・消化器感染症・性行為感染症・マラリアがまんべんなく選択された。

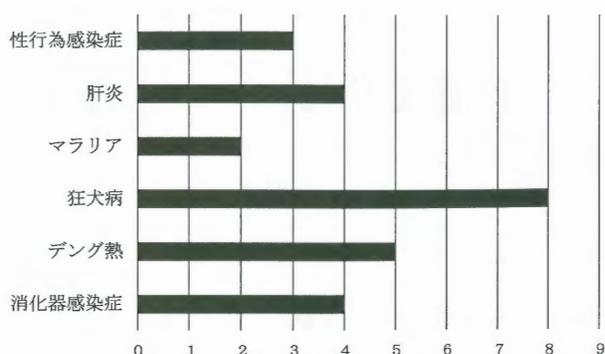


図5 気になる感染症

なお、聞き取りでは、これら以外の感染症も語られた。ひとつは“ヤンゴン病”と呼ばれる皮膚疾患で、着任して数ヶ月経過してから斑点状の皮膚症状の出現する邦人が多い。大気汚染によるアレルギー性皮膚炎説もあるが詳細不明である。また、顎口虫症による移動性皮下腫瘍のエピソードも語り継がれている。ヤンゴンで流通している鮮魚類の多くは川魚で、なかには“鯛の刺身”として川魚が売られていることさえあるという。淡水魚の生食を行った韓国人 60 人中 38 人に集団発生した報告⁸⁾もあり、脅威と感じる邦人もいる。

なお、アンケートでは少数であった「日本の本社」であるが、聞き取りではさまざまな発言が聞かれた。日本の本社が最大のストレス源とは、筆者自身、中国駐在員から頻りに聞いたところであるが、すでにミャンマーでも顕在化しつつある。特に「日本本社の意思決定の遅さ」を批判する声が目立った。案件を本社にあげてもなかなか進まない。動かない進まない。その間にライバルに案件をとられてしまう…等々。現地の人々が日本を皮肉る言葉として 4L というものがあり、Listen, Learn, Look, Leave (聞く、見る、習う、そして去ってゆく) の略であったり、NATO (No Action Talk Only) の略など、日系企業の意思決定の遅さは現地人にも知られている。対照的に、意思決定の速い韓国企業を羨む声も聞かれた。

さいごに

2014 年時点の状況を報告した。2011 年の軍事政権終了から、経済発展をめざして離陸し始めたところで、現



図6 街中や公共施設の中にも野良犬が徘徊し狂犬病の温床となる

地の在留邦人は、さまざまな前例なき事象に直面しながら日々をおくっている。西側諸国による経済制裁という“不自然な重し”がとれたリバウンドで、これまでいかなる国も経験したことのない短期間での変化が想定されるところ、引き続き、大きな興味をもって定点観測を続ける予定である。

文 献

- 1) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国における在留邦人メンタル事情. 臨床精神医学 2013 ; 42 : 389-92.
- 2) 勝田吉彰. ミャンマー連邦共和国の精神科医療事情. ころと文化 2014 ; 13 : 54-60.
- 3) 外務省. 海外在留邦人数調査統計 平成 26 年要約版. <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000049149.pdf>> (2014 年 10 月 12 日アクセス)
- 4) 山口洋一. ミャンマーの実像 (第 1 版). 勁草書房, 東京, 1999 ; p.168-85.
- 5) 田辺寿夫. ビルマ「発展」のなかの人びと (第 1 版). 岩波書店, 東京, 1996 ; p.37-43.
- 6) 外務省. 医務官情報. <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/asia/myanmar.html>> (2014 年 10 月 12 日アクセス)
- 7) 厚生労働省検疫所. FORTH 海外で健康に過ごすために地域別情報 : ミャンマー・ラオス. <<http://www.forth.go.jp/destinations/country/myanmar.html>> (2014 年 10 月 12 日アクセス)
- 8) Chai JY, Han ET, Shin EH, Park JH, Chu JP, Hirota M, et al. An Outbreak of Gnathostomiasis among Korean Emigrants in Myanmar. Am J Trop Med Hyg 2003 ; 69 : 67-73.